

資 料

妻が切迫早産入院中である夫の思い

荒井 清香, 今野 愛子, 船木 里子

Feelings of Husband whose Wives are Hospitalized for threatened premature delivery

ARAI Sayaka, KONNO Aiko, FUNAKI Satoko

キーワード：夫、妊婦、切迫早産、入院

Key Words : husbands, pregnant women, threatened premature delivery, hospitalization

要旨

本研究の目的は、妻が切迫早産で入院したことに対する夫の思いを明らかにすることである。研究参加者は、妻が切迫早産で妊娠20週代に入院となり、1～2週間経過した初産婦の夫3名である。データ収集は半構成的面接法を用いた。分析は夫の思いがよく表れている部分を抽出し、意味のあるまとまりごとにまとめてカテゴリー化を行った。その結果、＜夫自身に関する思い＞、＜妻への思い＞、＜胎児への思い＞、＜医療者への思い＞の4つのカテゴリーが抽出された。妻が切迫早産で入院している夫は、妻と生活空間が分離することで生活への対応に追われ、心身ともに負担が生じていた。また、妻と医療者に対して距離を感じていた。このような夫に対して、看護者が夫の面会時に声をかけ、入院時から夫のことも気遣っていることを伝え、夫の努力を理解して支持することは大切である。看護者が夫と信頼関係を構築することにより、夫の精神的負担は軽減し、妻が安心して入院生活を送ることにつながる可能性がある。

I. はじめに

切迫早産で入院している妊婦は、自らの切迫症状や胎児のことなどさまざまな不安やストレスを抱えながら入院生活を送っている。このような妊婦にとって家族からのねぎらいや励ましは、精神的な安定を得ることができるといわれている(御代田ら, 2004)。長川(1996)は、核家族化が進む現在の家庭では、夫が妻の重要な支援者となっていると述べている。また渡邊ら(1996)は、妊娠・分娩・育児の不安は夫に相談すると答えた妊婦が一番多かったと述べている。これらのこ

とから、夫の存在は妊婦にとって最も重要といえる。

唐澤ら(2005)は、切迫早産妊婦は入院生活において、他者との会話で思いを表出することで精神的安定を得ていたと述べている。研究者は、入院中の妊婦に対して他患のいる大部屋ではなく個室で落ち着いて話す機会をもち、より安心して入院生活を過ごせるような援助を行っている。一方、夫に対しては胎児の心音を一緒に聞いたり、超音波を見たりする機会を提供していたが、夫の思いを聞くような関わりを行ってはいなかった。妻が異常妊娠で入院することは、妻だけではなく夫にとっても大きなストレスである(新川,

2005) ことから、夫への負担も考慮した精神的援助が必要であると考えた。

切迫流早産妊婦のサポートを行う夫に関する先行研究から、御代田ら (2004) は、切迫流早産妊婦の入院により、夫は妻が病院にいることですぐに対処してくれるという安心感を得ているが、妻のストレスを気遣っているという心理的特性を明らかにしている。また新川 (2005) は、異常妊娠のために妻が入院している夫は、身体的にも精神的にも負担が高い傾向があるとしている。しかし、御代田ら (2004)、新川 (2005) の研究参加者は、妊婦の妊娠週数が初期から後期までと幅があり、妊婦の疾患も切迫早産だけではなく、悪阻や妊娠高血圧症候群などさまざまな疾患で入院している妊婦の夫を対象としていた。さらに、新川 (2005) は妻の入院によって夫の生活に変化が生じたことは明らかにしているが、変化が生じたことに対する夫の思いを明らかにしていない。蓼沼ら (2005) は、切迫早産で入院している妊婦の看護援助として、診断時の妊娠週数が若い妊婦ほど精神的サポートを考慮すると述べている。

以上より本研究では、切迫早産で入院している妻の妊娠週数が、腹部が目立ち始め、夫が妻の妊娠を意識し始める時期である妊娠20週代で (新道ら, 1999)、過去の経験から夫の思いに影響が出ない初産婦の妻がいる夫 (御代田ら, 2004) を対象とした。妻の入院によって夫はどのような思いでいるのかを明らかにすることで、夫に対する理解を深め、入院中の妻だけでなく夫も含めた援助について考えていく。

II. 用語の定義

夫の思い：妻が切迫早産で入院したことに対する感情や考え、及び夫の日常生活に与えた影響に対する感情や考え。

III. 研究方法

A. 研究デザイン

本研究では、妻が切迫早産入院中である夫の思いを明らかにするために、研究参加者が今までの経過を振り返り、自分の思いを自由に表現し、それを記述して分析する質的記述的研究法を用いた。

B. 研究参加者

研究参加者は、K市の産科病棟に切迫早産で妊娠20週代に入院となり、1～2週間経過した初産婦の夫3名である。

C. 調査期間

データ収集期間は、平成18年10月の1ヵ月間である。

D. 倫理的配慮

研究参加者とその妻に対し、書面と口頭で研究の趣旨を説明し、協力を依頼した。その際、匿名性を守り得られた情報は研究目的以外には用いず、妻および第三者に口外しないこと、研究終了時点で得られたデータはすべて破棄することを確約した。また、研究の拒否による妻の入院への影響は全く生じないこと、研究への参加は任意であり、どの段階でも中断することは可能であることを保証した。これらのことに承諾が得られた後、同意書に署名を得た。また、本研究は研究計画書の段階で研究参加病院の看護研究倫理委員会の審査を受け、承認された。

E. データ収集方法

研究参加者が緊張しないで自由に思いや考えを語ることができ、プライバシーを厳守できる個室にて、約1時間の半構成的面接を行った。面接は異性である研究参加者が緊張しないように配慮し、研究参加者1名、研究者2名の計3名で行った。面接内容はICレコーダーに録音し、逐語録に起こして分析することを説明して了承を得た。質問内容としては、妻の入院に対しての思い、切迫早産に対しての思い、面会時の思い、妻が入院したことによる生活の変化に対しての思いに焦点をあてた。

F. 分析方法

データの分析は、逐語録の中から妻が切迫早産で入院している夫の思いが表れている部分を抽出し、意味のあるまとまりごとにまとめてカテゴリー化を行った。その際すべての過程において、共同研究者とグループディスカッションを行った。また質的データ分析に精通している研究者より定期的にスーパーバイズを受け、妥当性の確保に努めた。

IV. 結果

A. 研究参加者の背景

研究参加者は3名であった。職業は3名とも会社員であった。妻の状況としては、入院時の妊娠週数は平均26.4週であり、面接時の入院経過日数は平均13.3日であった (表1)。

表1. 研究参加者の背景

事例	夫の年齢	職業	妻の年齢	妊娠週数	面接時の入院経過日数
1	30歳代	会社員	30歳代	妊娠23週1日	8日目
2	30歳代	会社員	20歳代	妊娠29週1日	18日目
3	30歳代	会社員	30歳代	妊娠27週1日	14日目

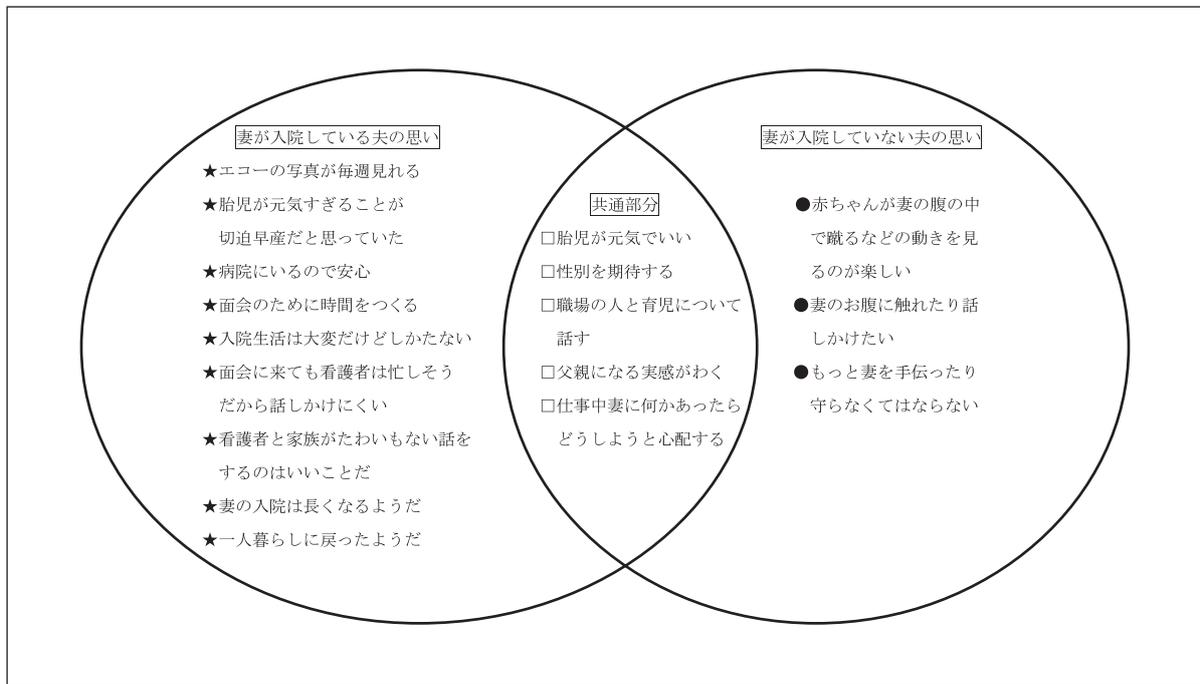


図1. 妻が切迫早産入院中である夫の思い

※上記★印は妻が切迫早産で入院している夫の思い、□は妻が切迫早産で入院している夫の思いと妻が入院していない夫の思いの共通する部分、●印は妻が入院していない夫の思いとして山本聖子他 (1995)：妻の妊娠期における父性性より引用

B. 妻が切迫早産入院中である夫の思い

分析の結果、妻が切迫早産入院中である夫の思いは〈夫自身に関する思い〉、〈妻への思い〉、〈胎児への思い〉、〈医療者への思い〉の4つのカテゴリーに分類された。以下に、妻が切迫早産入院中である夫の思いとして特徴的なものを表す (図1)。なお、〈〉カテゴリー、《》サブカテゴリーとする (表2)。

1. 〈夫自身に関する思い〉

a. 《入院による仕事への影響》

夫は妻の入院後、妻の代わりに用事を足さなければならぬことを面倒と思っていた。また妻との面会時間を作るために、仕事に影響があるという思いを持っていた。

「妻の入院は正直言ってめんどくさいな。ちょうど仕事が忙しい時期だったので、おいおい勘弁してくれよ (事例2)」 「もっと仕事をやんなきゃなんないんだけど、(妻の面会に行くために) 今日はこちらで切り上げなきゃ、やめざるを得ない (事例1)」

b. 《金銭の心配》

夫は妻が入院して間もないため、入院費がどのくらいかかるのか心配していた。また今後のお金のことは、考えていかななくてはならないと感じていた。

「入院費が全然みえないんで、どうなっちゃうんだらうって感じですね (事例2)」 「お金の心配はもちろんしなければならぬ (事例1)」

c. 《妻と離れた生活への適応》

夫は妻の入院後、自宅で一人の生活となったことに対して、結婚前の一人暮らしの生活に戻ったようだ

表2. カテゴリー表

カテゴリー	サブカテゴリー
夫自身に関する思い	入院による仕事への影響
	金銭の心配
	妻と離れた生活への適応
	妻と離れた生活による面倒
	一人での生活の物足りなさ
妻への思い	入院前の心配
	入院による安堵
	妻への心遣い
	妻への夫の努力
	妻とのつながり
胎児への思い	胎児への関心
	胎児に関する知識
医療者への思い	妻と面会するためのハードル
	医療者からの説明の要求
	治療に対する理解
	医療者とのコミュニケーション願望
	医療者を頼る
面会時間の制限	

感じていた。

「むしろ気楽になった部分というか。好きなときに起きて、好きなときに寝て、好きなときにゲームして過ごしてます (事例2)」 「一日の半分以上は会社にはいますから。妻がいないことに対して、特にそんなに不自由は感じないです (事例1)」

d. 《妻と離れた生活による面倒》

夫は妻の入院後、一人での生活に適応している反面、

妻の残した用事や食事の面で不自由を感じていた。

「いろんなことが残った状態で入院したもんだから、全部僕がやらなきゃいけない。それがめんどくさい(事例2)」「食生活とかで不自由する部分は多々あります(事例1)」

e. <一人での生活の物足りなさ>

夫は妻が入院し、一人の食事をつまらなく感じたり、生活に張り合いがないと感じたりしていた。

「せっかくの休みなのに、どこにも行かないし、一人で行ってもつままない。家にいてもつままない(事例2)」「家事はできますけど、やっぱり一人だと張り合いがない(事例3)」

2. <妻への思い>

a. <入院前の心配>

妻の入院前、夫は仕事で家を空けるため、妻が一人で過ごしているときに何かあったらどうしようと心配していた。

「妻が家に一人にいるときに、なんかあったらどうしよう(事例2)」

また妻が入院したのは、自分が仕事で留守をしている間心配をかけたせいであると感じていた。

「アパート借りて住んでるんですけど、ずっと日中は一人だったわけだから。その辺で心配もあったのかなって。心配をかけたことも、入院した原因といえ原因なのかなって(事例3)」

b. <入院による安堵>

妻の入院前、夫は仕事の間、妻を一人で家に残していかなければならなかったことや、家で腹部の緊張が増強しても寝ているだけで対処の仕様がなかったため、入院することで安心していった。

「病院がみてくれる分には、家にいる間に生まれたらどうしようっていうのはなくなるから、まあ安心かな(事例2)」「張りがひどくなってきたときに、家だと対処の仕様がでないじゃないですか。ただ寝ているだけで。だけど病院ですとやっぱり看護師さんがいて、先生方がいて、何かあればすぐに対処していただける。そういうところで非常に安心できますよね(事例1)」

c. <妻への心遣い>

夫は妻の性格をふまえ、入院している妻が安心できるように面会に来ていた。

「どちらかというといつは寂しがりやなんで。来るときはきて、話しをするだけでも違うと思うんで。まあ妻を安心させるためというか(事例2)」

また妻の体調を気遣って、面会時間を短くすることもあった。

「妻の体調が悪ければ、面会時間を短くしなければと思います(事例1)」

さらに入院している妻に心配をかけないように、自分の不安を妻の前では出さないようにしていた。

「お金の心配はもちろんしなければならないですけども、表に出して、そうすると患者のほうも心配するじゃないですか(事例1)」

d. <妻への夫の努力>

夫は、妻の入院に必要なものや退屈を紛らわすものを、仕事の合間に届けていた。

「なんか、気分れるものがあれば買って行く(事例1)」

また遠方で仕事をしているが、休日は妻のために長時間運転して面会にきていた。

「別に車を運転して来ることは苦になっていないんですよ(事例3)」

e. <妻とのつながり>

夫は、常に妻と一緒にいることはできないため、面会に来たりメールで連絡を取り合ったりしていた。

「妻の体調をメールで聞いています(事例3)」「妻は、持ってきてほしいものをメールしてくれます(事例2)」「家にいても、黙って何もすることないですから、ここ(病院)にいた方がかえって安心できる(事例3)」

3. <胎児への思い>

a. <胎児への関心>

夫は妻のお腹が大きくなることや超音波の画像を見て、胎児の成長を感じたり胎動を感じたりしていた。

「表現に乏しいんですけど、やっぱり(胎児が)動いているのを感じたときは、嬉しいっていうのはありました(事例1)」「子どもが少しずつおっきくなってきてるので、すごく安心している(事例3)」

b. <胎児に関する知識>

夫は胎児が動くことで妻のお腹が張り、切迫早産にはよくないと感じていた。また胎動により胎児の心拍数が上がることは、よくないことであると認識していた。

「やたらと赤ちゃん元気らしいので、これは(切迫早産の症状として)まずいのかな(事例2)」「お腹の中でクルクルって動くらしいんですよ、そうすると赤ちゃんの心拍数が上がって、あまりよくないんだって思う(事例3)」

4. <医療者への思い>

a. <妻と面会するためのハードル>

夫は面会に来たとき、窓口で看護師に妻を呼んでもらわなければいけないというシステムに戸惑っていた。

「入院してきたとき、ご主人がいらっしゃいましたよって大声で言ってるんですよ。恥ずかしいなと思って(事例2)」

また医療者が忙しく仕事をしているため、妻をロビーに呼んでもらうことに気兼ねをしていた。

「仕事してるのに悪いなっていうのもあるし、わざわざ呼んでっていうのもなんだし(事例2)」

b. <医療者からの説明の要求>

夫は妻の入院時に医療者からの説明が少なかったと感じていた。そのため、妻や胎児の状態、治療について医療者から説明を受けたいという希望をもっていた。

「母体、まあ、妻と子ども含めて、具体的にはどういう状態なのか、そういうところを、全般的なことを知りたい(事例1)」 「本人から聞く状態と、やっぱり看護婦さん、先生から聞く話、どっちが信用できる、安心できるかっていうと、スペシャリストの看護婦さんや先生方だと思う(事例1)」

c. <治療に対する理解>

夫は、妻の治療は安静、薬物療法であることや、退院にはまだ時間がかかることを認識していた。

「切迫早産ってことで薬を投与して、経過を見てくぐらいしかないんですよね(事例1)」 「ちょっと入院が長くかかるみたいですし(事例2)」

d. <医療者とのコミュニケーション願望>

夫は家族と医療者が話すことで、お互いの信頼感が得られると感じていた。しかし夫と医療者は話す機会が少ないため、医療者とコミュニケーションをとりたいという思いをもっていた。

「看護婦さんと医師と患者っていうのは、いろいろお話してやっているとと思うんですけど、そこに家族っていうのが全然入ってないっていうのが、すごい私がここで気になることだな(事例1)」 「(看護師や医師と)コミュニケーションがとれるといいなって非常に思いますね(事例1)」 「いろんな方と、そういう関係者と話がしたいな(事例1)」

e. <医療者を頼る>

夫は妻の入院については、医療者に任せるという思いを持っていた。

「もう、すべてお任せで、僕がどうこうしても始まりませんから、もう、すべてお任せして(事例3)」

f. <面会時間の制限>

夫は、病院で決められた面会時間内には仕事の都合で来ることができず、遅くなってしまうことを気にしていた。

「面会に来る時間があまり遅いとちょっと来づらい(事例3)」

また妻と話がしたいのに、時間制限があることを気にしていた。

「話したいことが多いときは、もっと面会時間があつた方がいいかなと思います(事例1)」

V. 考察

妻が切迫早産入院中である夫の思いは、<夫自身に関する思い>、<妻への思い>、<胎児への思い>、<医療者への思い>の4つの思いが明らかになった。

面接時期を限定したこと、夫の生活に焦点を当てたことから特徴的な結果が得られた。<夫自身に関する思い>と<妻への思い>は<妻が入院したことによる夫の生活の変化>としてまとめて考察する。

1. 妻が入院したことによる夫の生活の変化

御代田ら(2004)が述べているように、夫は妻が入院したことで、病院に任せて安心していた。一方、夫は妻の入院前と同様に仕事を行い、妻の入院前の役割を代行したり妻の面会に行ったりと目の前の出来事への対応に追われていた。夫は妻が入院したことによって安心したが、負担も生じている。看護師は、妻が入院してからの夫の負担を予測することによって、面会に来たときに食事の面で困っていることはないか、仕事に影響していることはないかなど声をかけ、夫のことも気遣っていることを伝えることができる。新川(2006)は、夫の行っていることに対して保証をするような声かけを行うことは、夫の無力感を多少軽減させ、妻をサポートすることに対する充実感や意欲を維持することを助けることを可能にするとして述べている。したがって、看護師が妻への夫の努力をねぎらうことで、夫自身が自分の努力を認識し、妻に対するサポート力は向上する。そして、夫を理解しながら信頼関係を築くことにつながっていく。唐澤ら(2005)は、精神的に不安定になりやすい妊婦にとって、スタッフから気にかけてもらうことは不安を解消するばかりか、大きな精神の安定を得ることができると述べている。したがって、夫婦の面会場面に看護師から声をかけることは、夫との信頼関係を築くと同時に、夫の負担を気にかけている妊婦の精神の安定を得ることになる。

2. 医療者への思い

a. 夫は、妻の治療に対する認識はありながら、妻や胎児の状態及び治療について、医療者から説明を受けたいという思いをもっていた。この結果は、妻が入院して1～2週間と間もない状況であることに加えて、妊娠20週代での入院であるため、早産の危険性がどの程度なのか、もし早産した場合どのような児が生まれてくるのか、今後入院してどう経過していくのか全く予測できないことが要因といえる。入院前は、夫は妻の体型や行動の変化、生活の変化などを把握することができていたが、入院して妻と離れたことにより、妻の状態を把握出来ない部分が出てくる。また、入院生活や治療についてわからない部分があるので、自分も妻と医療者の中に入りたいという言葉と、自分が入ってもどうこうなるわけではないという言葉のどちらも聞かれ、妻と医療者から距離を感じていた。御代田ら(2004)は、妻の捉えている現状と夫が捉えている現状とのギャップが狭まると、夫と妻との心理的距離が近くなり、夫の妻に対する情緒的サポート力が向上す

ると述べている。したがって、入院してできるだけ早い時期に、医療者からの説明を妻だけではなく夫も共に行えるような調整は必要である。夫が妻と同じように現状を理解することで、夫は妻を支えていくことができる。そこで看護者は、夫が妻のサポート役割を果たすことができるように、入院してできるだけ早い時期から夫との信頼関係を築くような関わりをもつことは大切である。

b. 夫は、妻の入院期間が不明なことにより、入院費がいくらかかるのかと気にかけていた。夫は妻の仕事の有無に関わらず、妊娠・分娩・産褥においては、経済的に支えていく役割を果たしていかなくてはならないと実感している。必要に応じて医療ソーシャルワーカーや関係機関との連携を図り、夫の金銭の心配による精神的な負担が軽減できるように、関わっていくことは大切である。

3. 胎児への思い

渡邊 (1997) は、看護者は夫を妊娠・分娩・育児の共同担当者として位置づけ、夫への父性意識の育成、知識・技術の涵養のために、積極的な役割を果たしていかなければならないと述べている。今回の研究参加者である夫は、自分は男であるため妊娠についてはわからないといった言葉や、胎児に関心がありながら、胎動によって胎児の心拍数が上昇することはよくないことである、胎動により切迫早産の症状が悪化するなど、妻からの説明を誤解している部分があった。外来を受診している妊婦の夫は、妊婦と一緒にいる時間が長く、現在の状況や今後について話し合うことができる。しかし妻が入院している場合は、夫は妻の状態に目が向きやすい。さらに、面会や電話だけでの連絡となり、夫婦で話す時間も限られてしまう。夫婦で過ごす時間が減少することは、妻の変化や胎児の成長について感じる機会が少なくなることにつながる。切迫早産で入院する妊婦の中には、入院が長期化する妊婦も多く、退院が出産予定日近くになることもある。そうなる妊婦の退院後から児を迎えるまでの期間が短いため、夫の分娩・育児への関心が高まらないうちに分娩に至る可能性がある。そこで、入院中の妻の夫という視点のほかに、胎児の父親になるという視点で関わっていく必要がある。外来通院に比べると、妻の入院により夫と看護者の関わる機会は増える。看護者が夫婦関係を理解し、夫婦に対して個別的な保健指導を行うことは大切である。そうすることで、夫が父親にな

るといふ役割の再編成を、円滑に行うことができる。

本研究は研究参加者が3名と少なく、妻が切迫早産で入院している夫の思いとして一般化するには限界がある。今後さらに例数を増やして検討していきたい。

VI. 結論

本研究は、妻が切迫早産で入院している夫の思いを明らかにした。

妻の入院後、夫は妻と生活空間が分離することで、生活への対応に追われていた。そのことによって、身体的にも精神的にも負担が生じていた。また、夫は妻と医療者から距離を感じていた。その一方、夫は妻に対してできるだけだけの努力とサポートをしていた。

文献

- 蓼沼由紀子他 (2005). 切迫早産により入院中の妊婦の予期的不安. 母性衛生, 46 (2), 267-273.
- 唐澤千秋他 (2005). 切迫早産妊婦の入院中の思いと看護者への期待. 第36回日本看護学会論文集 (母性看護), 143-145.
- 御代田亜子他 (2004). 切迫流産で長期入院している妊婦の夫の心理的特性. 宮城大学看護学部紀要, 7, 53-61.
- 長川トミエ (1996). 妊娠期の妻を持つ夫のソーシャル・サポート. 母性衛生, 27 (1), 58-63.
- 中浦由紀子 (2002). 父親の家庭参加を支援する～父親としての成長をアセスメントする視点の検討～. ペリネイタルケア, 21 (9), 18-21.
- 新道幸恵他 (1999). 母性の心理社会的側面と看護ケア. 東京. 医学書院.
- 新川治子 (2005). 異常妊娠による妻の入院が夫に及ぼす身体的・精神的負担の検討. 日本赤十字広島看護大学紀要, 5, 1-9.
- 新川治子 (2006). 切迫早産の初産婦の夫の妊娠や出産、父親になることに対する気持ちの変化－入院から出産までの追跡－. 日本助産学会誌, 20 (2), 64-73.
- 渡邊典子他 (1997). 妊婦が感じている不安・問題内容と対処方法. 母性衛生, 38 (2), 182-192.
- 山本聖子他 (1995). 妻の妊娠期における父性性 (第2報)－妊娠前・中期と後期における父性性の変化－. 母性衛生, 36 (2), 259-265.